草書本

猿飛佐助

熊野篇

神坂次郎

中公文庫

中公文庫 ©1986
草書本 猿飛佐助 熊野篇
昭和六十一年三月二十五日印刷
昭和六十一年四月 十 日発行
著者 神坂次郎
発行者 嶋中鵬二
整版印刷 三晃印刷
カバー トーブロ
用紙 本州製紙
製本 小泉製本
発行所 中央公論社
〒104 東京都中央区京橋二―八―七
振替東京二―三四
ISBN4-12-201317-8
定価 三六〇円

文庫

草書本 猿飛佐助

熊野篇

神坂次郎著

中央公論社

表紙・扉　白井晟一

目次

大雲取越え　7
白蛇の剣　14
胡蝶嵐　23
死者の棲む寺　30
音聞峠へ　39
飛べ、おッ爺　47
熊野の大隠居　55
蛇足の章　67
地底の滝　86
南蛮座敷　96
熊野まんだら　105
溶けていく顔　115

此为试读,需要完整PDF请访问: www.erton

オケラ責め　121
もう一枚の絵図　131
胴切坂　139
湯の峯王子　147
エスピンガルダ　161
湯壺の中　167
恋の車塚　173
流れ猫　181
黒い旋風　189
山姫明神　195
居すぐり立ちすぐり　207
蛇の眼　214
千匹狼　225
忍者の来歴——あとがきにかえて

草書本

猿飛佐助

熊野篇

大雲取越え

一

熊野、那智大権現から本宮にむかう中辺路は、大雲取、小雲取越えの重畳たる山脈を踏んで、山嶺八里の道程である。

この八里は尋常ではない。雲取とは、手をのばせば浮雲が掴みとれる、と行人たちが形容したところから出た名だという。

ゆらい、熊野三千六百峯の往還路は、ほとんど直線に荒あらしく山頂に駆けあがり、層々と雲に摩する尾根をひた走って峡谷になだれこみ、川を横切る。迂回をしらない山谷のきびしさは、すべて、山中頭陀の法を行ずる修験者たちのためにあった。

その、那智のお滝道から、竹藪をぬけて裏山のほうにのぼっていく男たちがある。

が、妙な男たちであった。同行の者にしては、いかにも行装がそぐわない。いま、熊笹と羊歯に掩われた山の径を先に立ってのぼっていくのは、柿色の袖無し羽織に革袴をはき、衝立のように張った肩に鉄拵えの太刀を負った牢人で、そのうしろを、からだのわりに図抜けて大きな頭に、

白髪のまじった髷を小さく結った、一見、堺あたりの商家の隠居のようにもみえる初老の男が、根竹の杖を手に一足ひとあし、ゆっくりと足を運んでいく。ふたりの後から荷を担いでいく痩せ身の、飴色の顔をした総髪は、金剛杖をつき熊野道者のような身なりである。

三人の男たちは、朽葉のつもっている林の中の径に入っていった。

林の中は春の陽をさえぎって、蘚苔が匂った。頭上に、木の下枝がびっしりと差し交わし、仄暗みに包まれて地肌が湿っている。そのせいか、蛇が多い。木の根の這った径のところどころに、足音におどろいて鈍い動きで身を匍いずらせていく蛇がみえた。

歩きながら隠居ふうの男は、足もとの蛇を杖の先で払いのけながら、ひくい声で、

「四角兵衛」

と云った。

「なんでござる」

「そろそろ、この辺りで吸筒の水でもふくんでおくがよい」

「なんと、足弱な殿の申されようかな。これしきの山坂にくじけ、水にかこつけて休息なされるのか」

「おろかな」

隠居ふうの男は、にがい顔をした。

「水というても飲みくだすためではないわ。よいか、いまのうちに咽喉を濡らし、目釘をしめしておけ、と申すのじゃ」

「――めくぎ、を」

「この不覚者めが、まだ気づきはせぬかい……先ほど、滝行場のあたりに居合せた修験めら、那智の滝衆かとも思うたが、そうでもなさそうな。われらの後をしとうて尾行てきおる……あやつら、どうやらこの幸村の首が所望らしい」

「これは面白し」

いうなり四角兵衛は、滝行でもしたように汗に濡れそぼった顔をふりたて、素迅く下緒を解いて背中の太刀をおろし、その下緒で袖をたくしあげた。そして腰に携げた吸筒の木栓を歯で引抜き、ぷっと吐きすて、刀の目釘を濡らして吸筒を逆さまにし、草鞋に水をかけた。紐がゆるんで不覚をとらぬためである。

「されば、殿。四角兵衛め径を駆けくだり、たちどころに斬り伏せてまいる」

「えい、この軽忽者め」

幸村は、呆れたような声をだした。

「このまま歩くのじゃ。よいか、気取られぬよう歩いていくのじゃ」

「……歩いてどうなされる」

「どうもせぬ。あやつらが討ちかかるまでは、われから買うて斬り合うこともあるまい。ただ歩くばかりよ」

「阿呆のように歩け、と云われるのか」

「まことの阿呆なら、いまごろは太刀をかざして鼻汗かいて斬り込んでおるであろうが、わしは

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

まだ阿呆になれぬらしい……それに、いのちも惜しいでな」

「けッ、この口へらずの殿め」

四角兵衛は目を剝いた。

そして、幸村の言葉がよほど癪にさわったのか、おのれの不満を踏みつけるように、えい、えい、と一足ごとに力をいれて径をのぼりだした。そんな四角兵衛に、幸村は思わず破顔ってしまった。

幸村は、あの頃のことを憶いだしたのである。

二

真田家の『先公実録』によれば、樋口四角兵衛という男は、生涯に二十五人を斬ったという武辺者であったが、奇矯な行状の持ち主でもあったらしく「天下に三人とない痴け者であった」と書き遺されている。

四角兵衛は、幸村が信州、上田の城にいた頃からの従者であるが、あるとき、幸村が舅の大谷刑部から贈られた名剣、来国俊をみて眼をかがやかせてねだった。幸村がしりぞけると、

「されば」

四角兵衛は膝をのりだした。

「それがしと双六をうち、刀を賭けてくだされ」

「双六……でか」
「いかにも」
そういうと四角兵衛は、くろぐろとした鼻の孔をふくらませ、碁盤ほどもある巨きな顔をふりたてた。
幸村は莫迦らしくなった。四角兵衛の双六下手は家中でも高名である。が、すっかり思いつめたような四角兵衛の髭づらをみているうちに、幸村はふと、この男をからかってみたくなった。幸村は双六が得意であった。ところが、どうしたことか、からかう筈の双六が三番続けて負けてしまった。
〈面妖な？〉
怪訝に思った幸村が、あとで賽を丹念にしらべてみると四角兵衛の振った骰子はインチキであった。
「おのれ四角兵衛、あるじを白痴にするか」
温厚な幸村も、これには腹をたてた。ところがすでに四角兵衛は来国俊を掴んで逐電したあとであった。
この話を耳にした父の昌幸は、幸村をみて嗤った。
「なにを怒ることがある、幸村。もともと博奕などというは、欺いて人をだしぬくものではないか。いわば、武辺の軍略よ。はよう四角兵衛を呼び帰し、情をかけてやれい」
いわれてみると、なるほど父のいうとおりである。幸村は、再び四角兵衛を従者にした。

「四角兵衛ゆるせ」

帰参した四角兵衛に、おのれの腹だちを詫びるように幸村が云うと、四角兵衛は、まるで幼児が高い熱でもだしたような面つきになり、地べたに平伏している顔をにわかにあげ、鼻の孔をひろげ口をひらいた。その口から、幸村が思わず後ずさりしたほどの大きな泣きごえが噴きでてきた。

「なにゆえ……なにゆえ殿が家来に詫びなされる」

そういうと四角兵衛は、また咆えあげた。

幸村は、天衣無縫な四角兵衛を愛していた。いつも自分の傍に四角兵衛をおいてきた。徳川勢にしたたか苦汁をすすらせた二度の合戦にも、関ヶ原にも、そして配流地の紀州、九度山への数すくない供の家臣の中にもくわえた。蟄居に心が鬱屈したときなど、幸村はよく、軽忽で単純な四角兵衛を相手に、さまざまな戯れをした。幸村の言葉に、四角兵衛はすぐムキになって牛まなこを剝いた。そんな髭づらの四角兵衛を眺めていると、幸村の気が晴れた。

三年ばかり前、幸村は京に来ている兄、信幸の家臣、河原右京のところへ書状を持たせてやったが、どうしたのか四角兵衛は、予定の日をこえても帰ってこない。心配した幸村は、小者の孫右衛門を京に差しむけたところ、四角兵衛は宿で歴をかかえて、うんうん唸っていた。

「いかがなされましたか」

そう孫右衛門が訊いても応えない。

宿のあるじにそっと尋ねてみると、なんでも四角兵衛は、河原右京に書状を届けての帰途、四

条河原の勧進相撲をのぞきこんだ。みているうちに腕がむずむずしてきたらしい。堪らなくなって飛入りをした四角兵衛は、いきなり鼻の甲という男に組みついた、まではいいのだが、ものの見事に投げ飛ばされ、脛の骨を折ってしまったのである。

「さぞ、痛うござりましょうな」

気の毒そうに孫右衛門がいうと、四角兵衛は鼻息を荒くして、

「たわけめ、侍たるものが脛の一本や二本折ったからというて目をまわすようで役に立つものか」

と力みかえり、副木をあてたまま、痛いのを怺えて、えい、えい、とばかりに四股を踏んでみせたという。

孫右衛門からの話をきいて、幸村は涙をこぼして笑った。痩せ我慢をしている四角兵衛の顔が目にみえるようであった。

白蛇の剣

一

その四角兵衛が、腹立ちまぎれに山肌を踏みつけ、幸村の前をのぼっていく。

幸村は、また、わらってしまった。

「益体もない、けろけろと女子のように何か可笑しゅうござある。お命を狙われているのは殿でござろうが。いまに太刀打ちがはじまれば、どうなされるお心算じゃ」

四角兵衛は、いまいましげな面つきで振りかえると、馬のような巨きな歯を剝いて声をだした。

「まず、わしは遁げるな——あとは四角兵衛、そちに任せよう」

「そうれ、ごらんなされ。殿はいつも四角兵衛を愚弄されるが、いざとなれば無うては悋いますまい」

「でない、とは云えぬ……いささか口惜しいがの」

四角兵衛の機嫌がなおったらしい。足のひびきが急に低くなった。

林の下径をのぼっていくと、にわかに視界がひらけた。幸村は眩しそうに双眸をほそめた。眼

のむこうに海がみえる。うらうらと春昼の陽光を浴びた熊野灘は、白銀を鋳流したように鈍くかがやいていた。

行く手の径を右にまわると、径は二筋にわかれ、左にくだれば円満地、蕨野にでる。右にのぼれば那智山第一の峯、妙法山阿弥陀寺の境内にはいる。

阿弥陀寺は、亡者の熊野参りの伝説によって諸国に知られ、奥の院のあたりを櫛山とよぶ。これは亡者の幽魂が三合の枕飯が炊けるあいだに、枕元に手向けられた櫛の一本花をもって阿弥陀寺に詣り、櫛を捧げていくところからこの櫛山ができた、と云われている。このとき、亡者は鐘楼の釣鐘を一つ打つ。そのゆえに、この寺の鐘は人なきに鳴るという。

〈その鐘を、生き身のおのれの手で撞くために、わしは那智にきた〉

心の裡で幸村は、ぽそりと呟いた。

おもえば、紀州、浅野家の監視の目をくぐり、九度山の屋敷を脱けだして熊野行をこころざしたのは、配居に果てた父、安房守昌幸の供養と、そして幸村自身、四十七歳の越し方を我が手で葬り生きながら亡者の一つ鐘を打ち鳴らすためであった。

にんげん一生二万日。すでにその大半が幸村をかすめて過ぎ去っていた。九度山でのさむざむした十五年の歳月は、幸村を枯らし、老いさせた。歯がぬけ、髪も白くなり、病がちであった。世の中から忘れさられるということが、どれだけ寂しいことか、幸村は知っていた。

が、いま。関東と大坂の手切れの風説は、諸国に満ちみちている。やがて、天下は真二つに裂け、大坂城を車軸にして凄まじい合戦が捲き起るにちがいない、と幸村は思う。おそらく、それ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton